

子どもの離家を契機とした語りにもみられる親の性別役割分業観 —4組の夫婦のケーススタディを通してみる性別親役割—

花形 美緒
(ジェンダー学際研究専攻)

I. 研究の目的と背景

2008年に国立社会保障・人口問題研究所が行った第4回全国家庭動向調査によると、「夫は外で働き、妻は主婦業に専念」の賛成割合は、それ以前の低下傾向から一転、増加したという。また、「子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事を持たずに育児に専念した方がよい」への賛成割合は、29歳以下で前回調査より増加したという。石井(2007)は、同様に父親と子どもとの接触時間等に変化が見られた総務庁の調査結果をうけ、日本の高度経済成長期に「企業戦士」として朝から晩まで働いてきた父親を見ながら育った世代の男性は、父親の重要な役割は外で働き家族を養うことだという固定観念が強く、子どもの養育やしつけ、教育などは妻に任せるといふことが多いためだと指摘する。このことから、家庭における「親役割」が自分の育ってきた家族や環境、社会状況から影響を受ける「性別役割分業観」と密接に関係しているのであれば、今後子育てをしていく世代について論ずるためには、子どもの離家以前の子育てについて親たちがどのように認識していたのかも深く検討していく必要があると考えられる。

家族の中で、大黒柱としての夫と助け手としての妻、そして子どもという役割を継続している近代家族規範の構築およびその維持は、根深く根強いもの(Martha.A.1995:上野監訳, 2003)であるが、その中で維持される親役割意識は、当然ながらまさに「子育て期」の親に焦点を当てられることが多かった。若松他(1991)は、子どもが小さく養育に手間がかかる時期は妻も夫も家庭内の役割に積極的だが、その後年齢が高くなると外での夫の仕事が重視され、夫だけの価値観ではなく妻も夫に家庭内の役割の分担を求めることが減っていき、その後妻が働くことに意義を見出すことを示し、夫と妻の性別役割分業観をみるとときには、生まれ育った時代よりもむしろその夫婦がライフステージのどの時期にあるかのほうが重要だという。

そこで本研究では、特に子どもが家を離れ、親役割が縮小する子ども排出期の夫婦を対象とし、子どもの進学・就

職・結婚というイベントを通して、これまで担ってきた「父親」と「母親」の親役割をどのように認識してきたのか、またそのステージに立つ夫婦互いの性別役割分業観と子育てや就業についての意識の違いとされているものは何かを、対象者の語りを通して、ジェンダー視点から探索的に明らかにしていくことを目的とする。

親子関係の研究において、育児期や老親扶養期が主要研究となっている今日、元気な親と成人子を扱った対等な中期親子関係の解明は研究の谷間に橋渡しとなる(長津ら, 1996; 春日井, 1996)ことに加え、子どもの離家というイベントを経た夫婦関係の語りは、現代社会における実践的な課題に答えることにも貢献しうる(長津, 2007)。そのため子どもが成長し家を離れる時期の親役割について、さらには「母親(妻)から語られた父親(夫)」ではなく、夫婦ペアでの語りを分析しているところに本研究の大きな意義があるといえよう。

II. 先行研究

1. 子どもの離家要因と親役割意識

日本における離家の理由は、国立社会保障・人口問題研究所が行った調査(2006)によると、進学、就職、結婚に大別される。女性の離家は18歳前後の就職や進学によるピークと結婚の頻度に合わせて20代後半に上昇する傾向があり(Suzuki, 2002)大都市では親元を離れずに進学・就職できるために離家の傾向が低いということも明らかになっている(Suzuki, 2001; 福田, 2003, 2006)。とくに欧米先進国にはみられない男子の結婚前離家が多い日本では(鈴木, 2011)進学による離家では生活費や授業料など親からの仕送りに頼るところが大きく、離家によって親子関係の継続が経済的側面から顕著になるのではないだろうか。しかし親の所得と子の離家に関する研究においては、親が高学歴である場合に子どもの離家を促進する(鈴木, 2003)という結果の一方で、親がもつ高い生活水準を享受し離家が遅くなる(福田, 2006)という結果もある。これ

らのことから、子どもの離家と親の経済状況などについて、日本では関係性が十分に検証されているとはいえ、離家というイベントごとに親が自身の経済的役割をどのようにとらえているのかを明示する必要があるといえる。

2. 性別役割分業観と親役割意識

夫婦間の家事分担に関する交渉や夫婦の力関係は、夫婦が世帯にもたらす経済資源により規定されるが、共働き家庭の女性にとっては収入と夫婦内の勢力関係はあまり重要ではなく、共働き世帯の夫の家事参加に関しては夫の性別分業役割観が重要である（石井，2003）という。「夫は外で働き、妻は主婦業に専念」という考え方に対する意識は変化がみられるが、家事は女性が愛情を込めて担うべき、という情緒的存在としての女性の役割が求められていたことが共働き夫婦の認識に差を生じさせている（島，1999）ため、性別役割分業観が男性の経済的役割と女性の家事役割というものを通して、親役割としてもそのまま子どもの教育費を担う父親と愛情を込めて世話をする母親という役割構造に結びついていると考えられる。永井（2004）は、親の側からみても子どもの側からみても父子関係よりも母子関係のほうが強いことを明らかにし、とくに悩みを相談するなどサポート的な関係としての父親の養育態度の必要性を示した。父親が性別役割分業観を通した親役割のみにとどまらず、子育てに積極的に関わっていくことが求められる。石井（2007）の指摘するワーク・ファミリー（ライフ）バランス研究の課題には、父親の家庭内役割分業の規定要因として家庭内要因にとどまらず父親の職場環境や会社のファミリーフレンドリー度を含める必要があるという。于（2010）は、中国における2世代の中年期夫婦について職場環境の変化が夫の家事分担に影響を与えていること、夫婦の情緒関係が家事分担の「夫婦協力」の変化に結びつくことなどを明らかにした。父親が定年退職など稼得役割を終えたのち、家事に協力的になる姿勢は、今まで経済的支柱として父親を認識していた子どもや妻には大きな変化であると考えられる。さらに子どもが結婚し新たな親役割を取得する際には父親たちはどのような役割観を期待するのであろうか。また母親たちとの意識に相違点はあるのか、明らかにしていく必要がある。

Ⅲ. 調査概要

進学、あるいは就職、結婚のために子どもが離家した経験を持つ夫婦のうち、最終的な離家イベントが起こった年から5年以内の夫婦を対象とした。対象者の属性は表-1に示す通りである。調査時期は2009年秋～冬期にかけてであり、インタビューは協力者の自宅や喫茶店などで行わ

れ、Aさん、Bさん、Cさんは夫婦一緒に、Dさんの夫は単身赴任中のため一人ずつ、それぞれ半構造化インタビューを行った。所要時間は50分～2時間であった。ペアでのインタビュー協力は父親が仕事等の理由で断られることも多く、母親のみのインタビューは協力者が集まったが、本研究ではペアで協力してくれた4夫婦を分析対象とした。大学進学時と結婚時では子どもの離家年齢に差が生じるため、対象者も男性で50代～70代、女性で40代～60代と開きがある。しかし父親たちは皆、高度経済成長以後の安定成長期・バブル期に仕事をしたことにより自分たちが子育てをしていた時代は経済が右肩上がりであったという共通の認識を持っており、対象者の年代の相違による時代背景に注意しながらも同じ分析対象として扱うこととした。

調査は、お茶の水女子大学グローバルCOE倫理規定に基づき、調査の趣旨説明後、調査対象者の同意のもとに行われた。調査内容は子どもが家を離れたときのことを、きょうだいごと、イベントごとに詳しくたずね、また家族の今までの生活や今後の計画なども尋ねた。インタビュー内容は対象者の同意を得てICレコーダーに録音し、その後テープ起こしをして文字データとし、それぞれの語りについて、夫婦の家庭内での役割はどのように語られているか、子育てや親役割においてジェンダー意識をどのように語っているかという視点を持って分析を行った。夫婦二人で応じてくれたA、B、C3組の夫婦については、その発言の重なりや相槌等も文字データとし、D夫婦については同質問に対しての回答を照らし合わせて、ペアデータとしての特性を活かして分析を行った。なお、夫婦のデータのために本文中で夫・妻と表記しているが、子どもとの関係を示す部分では父親・母親として記述した。

Ⅳ. 調査結果

子どもの離家というイベントを語る中で、夫婦の「子離れ」に対する感覚や発言には相違がみられた。また、子どもの性別や、進学や就職そして結婚という離家イベントの内容によってもジェンダーによる相違が語られた。そうした語りの根底にはそれまでの子どもとの関わり方、とくに親としての自分の担ってきた性別役割分業観がみられた。結果として離家経験の語り、子どもとの関わり方と親役割意識、を順にまとめていく。

1. 対象4夫婦の背景

Aさん夫婦——

静かな住宅地に住むAさん夫妻の子どもは二人姉妹。夫は幼少期に第二次世界大戦と中国からの引揚を経験し、

表一 対象者の属性と子どもの属性

		年齢	職業と就業時期	子どもの年齢・性別	子どもの学年/就業等	子どもの未既婚	離家時期
Aさん	夫	70代	無職（会社員退職後、自宅で仕事、その後無職）	32歳・女性	公務員	既婚	大学進学時離家→就職時自宅へ戻る→結婚時離家
	妻	60代	非常勤職員（子どもが中学・高校の頃から週2～3程度）	30歳・女性	会社員	未婚	大学進学時離家→就職時自宅へ戻る→仕事場の都合で離家
Bさん	夫	50代	会社員（会社員早期退職後1ヶ月前より再就職）	24歳・男性	会社員	未婚	就職時離家
	妻	40代	介護ヘルパー（1ヶ月前より開始、週4日程度）	22歳・男性	会社員	未婚	大学進学時離家
				20歳・女性	大学2年生	未婚	高校短期留学時一年間離家→自宅へ戻る→大学進学時離家（留学）
Cさん	夫	60代	無職（会社員退職後、アルバイト等、その後退職）	34歳・男性	会社員	既婚	結婚時離家
	妻	60代	無職	33歳・女性	無職	既婚	結婚時離家
Dさん	夫	50代	会社員	27歳・男性	会社員	既婚	大学進学時離家
	妻	50代	パートタイム労働（長男が大学進学後）	26歳・男性	会社員	未婚	大学進学時離家→就職時自宅へ戻る→転職時離家

敗戦の頃が「生活のドン底」であったことから、母親が自分の手を離さないで日本へ連れて帰ってきてくれたことに今でも感謝の思いが強い。帰国後の生活は「敗戦後の頃に比べたら」と、常に満足感が高いという。大手企業を定年退職し、現在は仲間とウォーキングを楽しむなどして過ごしている。妻は、専業主婦ののち現在は非常勤職員として働いている。妻が仕事を始める当初、妻には家庭を守り、仕事はしてもらいたくなかったという夫は、会社員時代に男女雇用機会均等法ができて女性の働き方についての考えが変わってきたともいい、妻は日中話し相手がいないのも辛いこと、近所の人も社会と関わっていることなどから説得したという。妻は「いまが一番自由がある」と生活に満足している。一方で年齢とともに健康への自信が段々なくなりつつあるともいう。

Bさん夫婦——

都心から電車で40分の郊外の住宅地に住んでいるBさん夫妻の子どもは、会社勤めの2人の息子と、学生の娘の3人である。夫は大手企業に勤務し、30代の頃は、幼い息子が帰宅した父親を見て泣いたり、「次はいつ帰ってくるの」と聞いたことがあるほど忙しい日々を送っていたが、娘の入院をきっかけに、家族と一緒にいる時間が多くなったという。3人の子どもはいずれも父親の勧めで中高一貫校を受験している。50歳で早期退職した年、夫婦で20カ国を旅行しており、その旅行の計画などはすべて夫が立てたという。夫婦二人暮らしの後、姪が自宅近くの大学に進学することになったため、現在は一緒に住んでいる。インタビューの1ヶ月前より妻は自分の母親の介護が必要になったらという考えで、パートで介護ヘルパーの仕事を始

め、家に一人であるのもつまらないからと夫も再就職、会社員として働いている。「60歳で定年を迎えたらまた旅行かな」と話し、今はいつも夫婦一緒にいる、と友達にも言われるほど、買い物も映画も散歩もテニスも一緒に、会話も多いというとても仲のよい夫婦である。

Cさん夫婦——

閑静な住宅地に住むCさん夫妻は、兄妹が、それぞれ結婚で初めて家を離れ、現在は二人暮らしである。娘はいつも仲の良い兄の後を追って、少年野球チームなど一緒に入りたがったが当時女の子は入れてもらえず、プラカードを持つなどの係をしていたという。リビングには子どもの幼い頃の写真や結婚式の写真が沢山飾られており、壁には妻が趣味で描いた絵が掛けられていた。妻は九州から嫁いできたため結婚当初は心細さもあったが、当時は社宅住まいで同じ会社の人の集まりだったために気を許せて話せたという。更年期で辛いときには周りで同じような経験をした人と話せて安心したといい、子育てのとき同様友人と話すことがとても大事だと考えている。講習などに積極的に参加し、夫婦ともに身体を適度に動かし、その講習などで知り合った人たちとの付き合いも増えているという、とても社交的な夫婦である。

Dさん夫婦——

転勤族で、引っ越しを繰り返していたD夫妻だが、忙しい夫はいつも留守がちであったため、ほとんど二人の子どもと母親の3人で暮らす日々であった。夫は、父親と母親では子どもに対してしなければならないことは違うと考えており、子育てについては妻に任せていたから心配はなかったという。子どもが中学生のときには学校や受験のこ

とも考え、夫の単身赴任という選択をした。その後息子二人が大学へ進学すると、家族は4人それぞれ一人暮らしになった。妻は長男の嫁ということで義母の介護をした経験や度重なる転勤により、地元という意識はあまり持たず、介護そしてお墓などは生活を縛るもの、と考えている。夫が定年退職後に現在妻の住む家に二人で住むことになるであろうと考えながらも、今はそれぞれが独立した生活を送っているという。

2. 離家経験の語り

1) 子どもの離家と親の生活変化の感じ方の相違

最初の離家経験についての父親と母親の語りには、いくつかの相違がみられた。以下は長女が大学に進学した際を振り返ったA夫婦の語りである。

夫A：寂しい気がしましたね。そのときちょっとね、妹がちょっとね。妹が、お姉ちゃんがいなくなるんね、なんつって、ちょっと寂しがったことはある。

妻A：そんな、ちょっとね。

夫A：でも本人は希望持ってたし、それは寂しいというより、よかった、というか。本人がそれを望んでいたし。寂しいという気持ちがあったことは事実ですが、それよりも、子どもにとっていい将来のために、道を選んだかなあ、という。そのときは、嬉しかったですね。本人も喜んでいました。

妻A：なんていうの、うちではなくて、子どもが戻るところっていうの、学校ね、行かなくちゃいけないところがあるんだなあっていうの。

夫の語りの中には、「妹」や「本人」という、子どもたちの感情を出すことによって、それを見ていた自分の感情と重ね合わせている様子が窺えた。寂しい、嬉しいというように一言で表わす感情が多く、そうした言葉で記憶を客観的に整理しているようにも捉えることができた。一方で、妻はそのときの思いを具体的情景とともに記憶していることが多く、帰省してもまた娘が「現在生活するところ」へ戻ってしまうというときに、成長して自分の責任の範囲外にいることなどを変化として感じていた。4人の母親たちは共通していつも子どもを見て心配を繰り返しながら育ててきたといい、家から出るということに心配はあるものの、見えないところへ行ってしまうえば帰りが遅いことや食事など日々の小さな心配はないのだと語った。子どもには幼い頃からいいことと悪いことはきちんと教えてきたから大丈夫であろうと言い、離家というイベントを通して子どもに対する強い信頼と自分の子育てへの確信が語られた。

子どもが家を出て、生活が変化する中で、特に夫が妻の感情変化に気付いていないという語りもみられた。長女が家を離れた頃の思いを「その頃、勝手に五・七・五（俳句）として書いていた」、という妻Aは以下のように語った。

妻A：その頃結構ね、その、子ども（次女）が高校生で、下の娘が反抗期とか結構ね、あったりで、なんかかんだ、ぐちゃぐちゃ書いていた。気持ちをそれで、なんかこう安定させてたとか、そういうのがあったみたい。

夫A：そんな書いてるなんてあまりしなかった。

妻A：だって、そんな私が言ったら「季語が無い」とか言ったから。

妻の気持ちを整理し、書き綴られた五・七・五は、夫にその感情を理解してもらうための術にはならず、自身の思いを記すための手段としてのみ用いられていた。夫たちは当時仕事が忙しかったと語ることが多く、家庭のことを考える時間も余裕もなかったという。夫Dは、単身赴任中に子どもの離家を経験したため、離れて住んでいた妻Dの生活変化について尋ねると、以下のように語った。

夫D：知らん、これは、分からない。うーん。何も変わってないんじゃない。

当時義母の介護をし、長男を進学のために送り出した妻Dの生活は忙しく、目まぐるしく変化していたが、それが日常であると捉える夫には変化としては感じられなかったようであった。忙しい夫たちは自分から敢えて妻の変化感情に歩み寄ろうということはしなかったようである。子の離家に対する変化の感じ方には夫と妻では相違が示された。

2) 子どもによる相違とイベントによる相違

子どもの性別や出生順、親とのそれまでの関わり方によっても、また進学や就職そして結婚というイベントの種類によっても、離家の語られ方は異なっていた。同じ年に娘と息子が家を離れた妻Bは、当時子どもが家を離れた理由として以下のように語った。

妻B：もう（娘が留学を）決めちゃったものはない、もうここで手放すしかないのかなっていう、気はしたんですけど。それこそ寂しいのは（ありました）。その、すごく病気がちな娘だったので…(中略)…たくましくなったな、と。逆に反発なんだろうな、とは思ったんです。私がすごく心配症で、心配ばかりしているから、「できる」っていうのを見せたいってところがあったんだと思うん

ですよ。

妻B：(息子は) 大学受験で。うちから出たかったんだと思う、あの子。

妻Bは、留学した後よりも、行くと言われたときのほうがショックだったというが、娘の意思決定について、反発という成長心の表れであったと語る。同じ時期に夫が早期退職をしているために、娘の離家後は寂しいということを考える間もなくいっしょくたに終わってしまったと振り返った。次男の進学については、小さい頃から「何をやってもお兄ちゃんには勝てない」というところがあった弟が、長男の行った大学には負けたくないという思いがあったのではないか、家から出たかったのではないかと息子の思いを汲んでいた。3人の子どもが「自分はできる」というところをそれぞれ親(自分)に見せたかったのだろうとしながらも、特にその中で兄弟はお互いをライバル視する関係もあったといい、親が同じように教育の機会を与えて育てても、子どもたち自身の中には妹(女の子)と兄弟(男の子)という区別意識が存在したのではないかと考えられる。一方進学時には自宅から通っていた長男が、就職で家を離れたときのことを、夫Bは以下のように語った。

夫B：一人で、住んだことないんでね、長男はね。大学卒業して初めてですから。その部分だけです。その、場所とかそういう問題よりも、一人で住んで、ちゃんと着替えるかとか起きれるかという、そういう…一人でちゃんと洗濯するのかとかね。

夫Bは、長男の生活する力についての心配を口にした。学生と社会人とは親が送り出す意識が異なるようであるが、学生として家を離れた娘と次男については、このような日々の生活(食事や洗濯など)についての不安や心配は語られなかった。日々の生活や家事についての心配は、母親から語られることがほとんどであったが、夫Bは子どもの受験時などから積極的に子どもの教育に関わってきたために、子どもの日常生活について心配する視線と距離で生活していたといえる。イベントによって離家後の生活の心配にも相違がみられ、2回目は生活については心配しなかったと語る親もあれば、仕事をしていることでの成長を感じると語る親もあった。

妻D：(就職で家を離れたときは) 本当にこう、離れて行ったなあ、ていうのを感じましたよね。うん。それとこう、学生の頃って、お米送って、とか、そういった本当にちっちゃなちっちゃなことなだけけれども、送ってとかね、まだね、おねだりがあったのに、社会人になって一切そ

うことがないから…(中略)…どこかでそういう線をひいたのかしらって。

妻Dの語る息子の離家への思いの相違は、息子の成長の変化の捉え方でもあった。

一方夫Dは、進学や就職、結婚といったイベントについて本人の意思を尊重しているとし、それは成長というようなものではなくその年齢であれば当たり前のこととして自分自身も全て行ってきたことであり、自己責任において本人がすべきであると語った。妻Dは、自分の就職時の経験から、働いてお給料をもらうということはとても大変で、迷惑をかけてはいけないという思いから、子どもが働くということに成長を感じていたが、同じように自分の経験と重ねる場合でもこのような相違がみられた。

また、結婚は、進学や就職よりも個人的なタイミングで起こるイベントであり、特に親の語りの中では子どもの性別や親の性別によっても語りに相違がみられた。C夫婦の息子は、学生時代から7年以上の付き合いのある、いわゆる「親公認の仲」の相手と結婚した。両親は、「結婚する」という報告を受けたときのことについて、以下のように語った。

夫C：やっとなああってね、いきなりこう(結婚すると)言われたわけじゃなくて、いきなり全然(知らない人を)連れてきたっていうんじゃないから。いつかは(結婚)するんだろなああって、やきもきしてたから。

妻C：それこそ相手のご両親様は、それこそ女の子さんのね、ご両親だから、ほんとすごく気にされてたんじゃないかなあって。

夫C：むしろ今度娘のほうが、これから結婚とかね。そっちのほうが今度もう気持ちがね。年子だから、ね、歳が離れてないでしょ。同じくらいの年齢ですから、いや、ちゃんとした結婚ができるのかなって、そっちのほうが心配今度出てきちゃって。

長い付き合いの二人を見守りながらも、「いつ結婚するのか」という時期については両親ともに気にかけてはいたようだが、その視点は夫と妻で異なっていた。結婚が決まった頃、息子の仕事先は不景気のあおりを受け不安定だったために、転職をしたことから、夫は長男の経済的な安定と結婚のタイミングを考えていたが、妻は、相手や親について、「女の子の親」は、より結婚のタイミング(年齢等)を気にするのではないかと、という思いを語り、それと同時に自分と娘の関係性を重ねてもいた。C夫婦の娘は結婚で家を離れる際に両親のような夫婦になりたいという思いを手紙にしたためており、子どもの結婚というイベントは、

自分たちの築いてきた家族を振り返るきっかけにもなっていることが明かされた。経済的な面で夫が気にすることは、家庭内での役割としての性別役割分業観を示すと同時に、親としての役割という語りにもつながっていった。

3. 性別役割分業観と親役割意識

1) 経済的支柱としての父親と、家事を担う母親

子どもの結婚について、夫Aは、長女の夫が結婚前に転職を経験していることについて、多少話しくさくさ、言葉を選ぶように語り始めた。

夫A: 普通のサラリーマンのほうが(転職後の仕事よりも)つらいかもしれないけど、一生のことだからと、いろいろ。だんだん階段を上っていくような事もできるから、と言いかけたら、もう仕事は辞めたということで。そういうときに、この、結婚してうまく家庭は築けていけるのかな、と、これが気になって。生活力が。その、収入は、女のほうが多いという家庭ですから。その辺が、心配といえば、心配。

妻Aはこうした夫Aの発言に対して、現在の経済状況は自分たちが結婚した頃とは異なるために、定職や安定ということはあまり問題ではないと言葉を加え、自分たちの担ってきた性別役割分業観は変わってきたという意識を示した。夫Aは、最終的には娘が決定したこと(相手)には肯定的であり、経済的な部分は親として確認すべき点であると述べたが、自身の担ってきた経済的役割を父親が担うべきという考え方は強いようであった。同様に、自分たちの頃は経済成長期であり生活は上向きであったという夫Cは、結婚した息子と娘に対して以下のように異なる希望を語った。

夫C: 息子はね、自分のこれからの将来をね、ちゃんと考えて、えー、人生設計じゃないけど、そういうの、いろいろをもっとしっかりしてもらいたいというのがあるよね。娘のほうは、そういう意味では、あの、旦那さんのほうがしっかりしているから、まあ、安心して付いていけばいいのかなあっていう風にちょっと思ってるんですけどね。

父親たちには、経済的に家族を支えるということに対する自負があり、それは自分がしてきたことと同様に息子や娘の夫にも要求する役割であった。

一方母親たちは自分の家庭内役割として子どもの離家や成長を語る際に食事の支度について語ることが多く、子どもが家を離れて感じた変化にも挙げ、子どもが就職時に一度自宅に戻っていた際にまた「おさんどん」が始まった、

というなど生活の大きな割合を占めていたように語った。妻Aは娘の里帰り出産時期は賑やかで楽しかったといい、食後の片付けの動機付けを語った。

妻A: 毎日ご飯作るのに、今日の夜何にしようかしらって。買い物、毎日何しようかしらって言って。ああ、食べればその後始末、片付け大変とか思ったんですけど、でも、なんかね、あの、赤ん坊がいるから元気だったのかな、と思いますね。そうそう、お茶碗洗ってもすぐここ(居間)へ来て、顔見て、「あら〜」とか言ってやったりとかね。で、帰ってしまったら、お茶碗、ご飯食べた後流しに入れても、いいわ、後でやるわ、とか言って。

妻Aは、自身の役割と感じている食事の支度や片付けは大変とは思いつつも、食べてくれる人の存在やにぎやかな赤ん坊のいる生活ではそれほど苦にならず、定年退職した後に自宅で仕事を始めた夫が、ご飯の支度が出来ても食卓についてくれなかったと「孤食」を経験したことが大きなストレスであったと語っており、食事を作ったのに一緒に食卓を囲めないことのほうが作り甲斐もなく負担感を生んでいたということが明かされた。

妻Cは食事の支度について、自身の仕事であると認識しながらも、夫が定年退職した後に具合が悪くなったことがあり、食事を作りたくない時もあったという。その後夫の一言で気持ちが変わったと以下のように語った。

妻C: お父さんに、もうお昼は何でもいいよ、って(言われて)。一言で。そう何でもいいんだって、ふわって、気持ち少しづつ(軽くなって)。

妻Cは、その後夫は苦手ながらも洗い物など家事を手伝ってくれているといい、今は週に1回、自分が出かけているときには夫がお昼を作ってくれるのだと嬉しそうに語った。夫Cは、「チャーハン専門」だと笑いながらも、妻の負担を軽減できている自分の行動を自覚していた。その一方で、定年退職後も、食事の準備は基本的には今まで行ってきた妻の仕事であると認識していた。

子どもの離家や生活の変化に関しては妻の感情に歩み寄りを見せることの少なかった夫たちであったが、性別役割分業観については妻や子どもの生活に重ねながら自身の役割を少しずつ変化させながらも提示していくという姿勢がみられた。

前述したように父親の性別役割分業観は、自身が仕事をしている(していた)ということで家族を経済的に支えてきたという自負のもと、強固なアイデンティティを形成していたが、それは家庭内役割としてそのまま「親」役割に

も影響していた。夫Aは、長女の離家当時会社が忙しかったと語ったが、下宿先など重要なことを決定する際には同行していたという。

夫A：まだ会社にいましたから、土日をかけて（長女とふたりで、下宿探しに）行きましたね。そういうことがありましたね。

夫A：そうそう、（下宿先など重要なことを）決定するときは、父親が。

夫A：家賃を実際出すのと。責任がありますから。

父親には、仕事をして経済的に家庭を支えることが自分の家庭内役割であるという意識があり、その役割を家族に示し、その役割を通して子どもと関わっていたという意識が存在した。夫Aは、退職後に長女が里帰り出産で実家に居たときには、今まであまり積極的に家のことをするほうではなかったが、孫の沐浴の手伝いをしたのだと、自身のもつ性別役割分業観が時代や家族の変化とともに変わってきたということを明かし、家族の経済的な支柱となっていた「父親役割」を定年退職後に、新たにできた「祖父役割」を取得したことを語った。父親たちからは、進学による離家の際には実際の扶養や「家賃を出す」といった経済的役割の継続を意識していたが、徐々に離家という子どもの自立を通しての自身の親役割の変化についての気付きがあり、その後子どもにとって経済的役割を担う父親としての役割を終えるという過程が語られた。

2) 親役割を子どもに示さない父親

夫Dは、同様の性別役割分業観を持ちながらも、仕事で遅くなることや単身赴任など、家で子どもと接する時間が短かったことから、親役割についてそれをあえて子どもに示すことはしないといい、自身の意識を以下のように語った。

夫D：（自分が子どもに対して）お前はこうしなければならないって、全部ずーっとして見て、やらせられるわけがないから。だって、僕がいなくなつて、勝手に動いてくれないと困るから。

夫Dのこの言葉は、経済的な役割だけを担いそれ以外の親役割を放棄した個人主義的な言葉ということではなく、子どもが幼い頃から仕事が忙しく、傍にいらなかった自分が、子どもの自立を求めるがゆえの思いから語られたと考えられる。妻Dも子どもたちや夫に対して同様の自立志向を要求しており、自分たちの介護や今後の生活で子どもたちの生活を制限するようなことはしたくないとい

う。D夫婦が今まで行ってきた経済的に家族を養う父親の役割とそれ以外は母親が全て担うという役割分業は、自分たちの時代に合わせた選択の一つであり、その背景には、転勤族ゆえの感覚と、朝から晩まで仕事をし家庭内のことは妻に任せるといった企業戦士の姿を生み出す日本の経済社会のシステムがあることがうかがえた。

3) 相談役として継続する親役割

性別役割分業観に基づく親役割以外にも、父親の親役割は語られた。夫Bは教育熱心であり、子どもの進路選択や手続き等にも積極的に関わってきており、「相談役」としての役割は、子どもの離家後も続いていた。以下は現在の娘からの相談と、息子からの連絡についての語りである。

妻B：連絡ですか、娘（から）は、毎日きますね。

夫B：もう毎日のように来ますよ。

妻B：息子たちは、何か無い限り（連絡は）来ませんね。

夫B：いや、そんなことはない。長男は、都内に住んでるんで、しょっちゅう、会ってます。夜飲みにいったりしています。

妻B：私には、全く来ません、二人とも。娘も、私じゃなくて主人に連絡したいの。

就職した長男と父親は、同じような業種ということもあり、相談をうけることも多いという。もともと高校生の頃から、娘も息子も交際相手を自宅に連れてきていたというオープンな家族であり、妻Bは、自分は最近息子には会っていないと繰り返したが、子どもたちが父親に相談し頼りにしている姿を今までも見てきて知っている、という口調であった。B夫婦は、さまざまなことに対し計画を推し進め決定権力を持つ大きな「父親」の存在感がありながらも、非常に家庭内の会話も多くコミュニケーションが良好な家族関係があるために、父親役割としての威圧感が生じていなかった。

また、仕事と家事という面では、典型的な性別役割分業観に則ってこなしてきたC夫婦だが、子育てをする際の子どもの接し方という「親役割」については性別による役割意識差はあまり語られなかった。

V. 結論と考察

本研究では、子どもの離家というイベントに対する語りには夫婦でどのような差が示されるのか、縮小する親役割を語る際にどのような親役割や性別役割分業観が影響するのかを分析してきた。得られた知見は以下の通りである。

第一に、子どもの離家に対する表現の相違、子どもの性

別やイベントによる相違がみられた。子どもが家を離れるというイベントに対する思いは、さまざまな表現で語られたが、妻は「子どもが帰る場所が（別に）ある」ということなど、離家による変化への気付きに寂しさを重ねて自分の思いや経験を「自分」の固有のエピソードとして主観的に語るものがあった。一方で夫は常識的にはこうだというような前置きをして語り始めたり、「寂しい」「嬉しい」「心配」という形容詞で子どもの新しい生活を語ることによって、自分の思いを語っているにもかかわらず客観的ともとれるような表現があった。清水（2004）は、母親は娘の巣立ちに関して、アイデンティティの課題に直面している青年期の娘との同一視を通して自らのアイデンティティの再考を促されるのではないかと指摘しているが、子の巣立ちという大きなイベントに関しては、夫も妻も自身の経験を重ねることがあった。自分同様に当然子どももそうするだろうと考える夫や、子どもにも経験のタイミングを考えてほしいという妻など、自身の経験も同時に振り返って語るということは共通していた。

第二に、子どもの離家による妻の感情の変化に対し、夫は理解や気付きが乏しいということが明らかになった。妻のストレスに関しては夫の妻に対する情緒的サポートが妻の家族役割負担感を減少させるという（稲葉、2005）ことなどから、性別役割分業観が強く家庭内の家事・育児役割に関わってこなかった夫はそうした情緒的サポートにも消極的となり、結果として妻の負担感を生むというサイクルが考察される。

第三に、進学と就職、結婚という段階によっても子どもの成長や変化も感じられ、とくに結婚においては親の性別役割分業観と同様の役割分業観が期待も込められて語れることが明らかになった。家庭内平等の多様化については、世代間での役割分担が性別役割分業観をそのまま反映していくという（岡村、1990）ことから、親世代が持つ性別役割分業観は、子育てや日々の生活を通して子どもに期待され受け継がれていくであろうことが示唆される。

第四に、強い性別役割分業観をもつ父親は、自身の経済的支柱としての家庭内役割を通して子どもと接し、その役割のまま子どもと関わっており、親役割にもジェンダーによる相違がみられた。対象となった4組の夫婦においては「父親」の経済的立場は家庭内で大きく認識されており、仕事で忙しく留守がちであったにも関わらず、決定権は父親にあったようにその存在が中心的であり、妻自身もその経済的支柱としての役割を認めており、性別役割分業観を維持させていたと考えられる。一方夫が退職後は家事など日常生活において手伝いを行うなど妻の役割を軽減させたり、孫の入浴などの手伝いをするなど新たな役割取得のための家庭内での歩み寄りも示された。

子どもを育てる上で父親の存在の重要性を謳った林道義の『父性の復権』などで強調されている子どもが幼い頃に求められる「父性」とは異なり、中年期の父親たちが、子どもに思うこと、子どもの結婚に求めることには、性別役割分業観を通して自身が担ってきた経済的支柱という親役割が語られた。子どもの結婚に際して息子にはしっかりとした経済観念や計画を期待し、娘には夫を支えることを求めるなど、今まで夫婦間の役割調整の規定要因として扱われることの多かった性別役割分業観の「夫は外で働き、妻は主婦業に専念」という意識は、親子関係においてもそのまま映し出されていることが明らかになった。

1995年に行われた「女性のライフスタイルに関する意識調査」の結果から、船橋は「母親だけで孤軍奮闘する育児のつらさやゆがみが社会的に明らかになってきた今日、子どもは夫婦で協力して育てることが当然視されている」という（船橋、2002、48）。しかし父親の育児内容については、母親が子どもの身体的な世話をするのに対し、父親は子どもと遊ぶなど比較的楽な育児であるといい、進路や就職などに関する重要なアドバイスは父親が行うことも多くなっていることが明らかになっており（Ishii-Kuntz、2003）、このような指摘からも、積極的に子どもの教育に関わってきた夫Bを始め、現在子育てをしている親たちの姿は、子育てを終えた親世代が行ってきた「親役割」と「子育て」の仕方に類似していると考察できる。今回のインタビューでは、子どものトイレトレーニングなど幼少期の身体的な世話を始め日常生活における食事の支度などの話題のほとんどは妻側からしか語られず、夫たちからはそうした日常に関わらなかったということについても多くは語られなかった。子どもの「日常」の共有がなされない限り、夫たちは自身の経済的支柱役割こそが自身の親役割であるとし「親役割」にも性別役割分業観があり続けるのではないかと考えられる。

本研究では、インタビュー対象者が4組の夫婦と少ないために、子どもの性別や離家イベント別では様々な状況を捉えることができたペアデータとして貴重な語りであるといえるが、これらの語りを一般化することはできないという限界がある。また対象者は大都市近郊に住み、夫が経済的支柱であるという夫婦であり、多様な家族形態を捉えることはできなかった。今後は多様な経済状況や家族構成も考慮しサンプリングを設定する必要がある。本研究には多くの課題があるが、子どもの離家というイベントの語りを通して夫婦の意識の根底にある性別役割分業観や親役割に相違を示すことが出来たのは、それを受けてこれから子育てをしていくであろう子ども世代への影響という点からも一定の意義があると考えられる。

(文献)

- 福田節也, 2003, 「日本における離家要因の分析—離家タイミングの規定要因に関する考察」『人口学研究』33, 41-60
- 福田節也, 2006, 「未婚女性の離家・ライフスタイル・結婚」『季刊家族経済研究』72, 31-42
- 船橋恵子, 2002, 「「幸福な家庭」志向の陥穽—変容する父親像と母親規範」『少子化時代のジェンダーと母親意識』第3章, 新曜社
- 稲葉昭英, 2005, 「家族と少子化」『社会学評論』56, 38-54
- 石井クンツ昌子, 2003, 「女性の就業と夫婦関係」渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編『現代家族の構造と変容』第9章I, 201-214
- Ishii-Kuntz-M., 2003, Balancing fatherhood and work : Emergence of diverse masculinities in contemporary Japan. In J. Roberson & N. Suzuki (Eds.) *Men and masculinities in Japan*. Routledge. Pp.198-216
- 石井クンツ昌子, 2007, 「父親と青少年期の子どもの発達—父親は子どもの社会性にどのような影響を与えているのか」耳塚寛明・牧野カツコ編『お茶の水女子大学21世紀COEプログラム誕生から死までの人間発達科学 学力とトランジションの危機—閉ざされた大人への道』第7章, 125 - 142
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2006 「第5回世帯動態調査」
<http://www.ipss.go.jp/ps-dotai/j/DOTA15/Nshc04gaiyo.pdf>
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2008 「第4回全国家庭動向調査」
http://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ4/NSFJ4_gaiyo.pdf
- Martha.Albertson Fineman, 1995, *The neutered mother, the sexual family and other twentieth century tragedies*, Routledge (= 2003, 上野千鶴子監訳『家族、積みすぎた方舟』学陽書房)
- 明治生命フィナンシアランス研究所, 1994, 『中高年期の生活実態と引退後の生活意識に関する調査』
- 永井暁子, 2004, 「父親の子育てによる父子関係への影響」『季刊家計経済研究』64, 55-65
- 長津美代子, 2007, 『中年期における夫婦関係の研究—個人化・個別化・統合の視点から』日本評論社
- 長津美代子・細江容子・岡村清子, 1996, 「夫婦関係のレビューと課題：1970年以降の実証研究を中心に」野々山久也・袖井孝子・篠崎正美編著『いま家族に何が起きているのか：家族社会学のパラダイム転換をめぐる』ミネルヴァ書房 159-186
- 岡村清子, 1990, 「主婦の就労と性別役割分業—女性の職場進出は家族の役割構造を変えるか—」『家族社会学』2, 24-35
- 島直子, 1999, 「性別役割分業を維持する意識構造—「愛情」イデオロギーの視点から」『年報社会学論集』12, 26-37
- 清水紀子, 2004, 「中年期の女性における子の巣立ちとアイデンティティ」『発達心理学研究』第15巻 第1号, 52-64
- Suzuki Toru, 2001, "Leaving the parental household in contemporary Japan," *Review of Population and Social Policy*, 10:23-35
- Suzuki Toru, 2002, "Leaving Home in Japan : Its Trends, Gender Differences, and Determinants," *Working Paper Series (E)*, National Institute of Population and Social Security Research, No.15
- 鈴木透, 2003, 「離家の動向・性差・決定因」『人口問題研究』59(4), 1-18
- 鈴木透, 2011, 「世帯動態調査からみた家族の現状と変化」『家族社会学研究』23, 23-29
- 高井範子, 2002, 「人生に対する後悔および充実感の視点による生き方態度に関する研究」『大阪大学教育学年報』第7号, 131-141
- 東京都老人総合研究所社会学部, 1982, 『中高年の生活と老後—有配偶の場合—』
- 于建明, 2010, 「中国都市部における中年期夫婦の家事分担—認識と評価—」『家族関係学』29, 75-88
- 若松素子・小口菜採・柏木恵子, 1991, 「妻の就業をめぐる夫と妻の社会的性役割観」『東京女子大学紀要論集』42(1), 157-183

Parenting Gender Consciousness as Fathers and Mothers : Looking Back on Their Child-Rearing

Mio HANAGATA
(Interdisciplinary Gender Studies)

Gender roles are inherited from both parents. Many adolescents grow up with the image of their father having a full-time job from morning until night to support the family. And then they become a mother or father. The purpose of this study is to show parents' gender consciousness "as fathers" and "as mothers" looking back on their period of child-rearing.

In this study, I conducted semi-structured interviews of 4 fathers and mothers in 2009. They were in their home or a café near the station for the interview. It took about 50-120 minutes. I asked them to describe the events of their children leaving home (because their children had advanced to university, gotten jobs and were married), family life in the past, future family life and their hopes for the future.

In the interview, when fathers spoke of the events of their children's leaving home, they would say, "my children feel", on the other hand, mothers said, "I feel". Fathers expressed their feelings and opinions in abstract terms and while mothers explained their feelings with concrete descriptions. And they seemed to intentionally raise their children with gender differences, as a boy or a girl, especially during early adolescence.

Many of the fathers acknowledged their important economic role in the family, such as being the breadwinner. Fathers didn't talk about daily child raising (for example, their experiences changing diapers, feeding, and changing of clothes) similar to some previous studies. Most fathers discussed how they were involved in the care of their children and gave their children important advice about their career and employment. They recognized that they worked for family which led to their fatherhood. Young parents have done similar things as their fathers and mothers, when it comes to parenting and child-rearing.

With the share of daily child raising, parents can do equal parenting, and can improve gender relations in the family in the years ahead.

Keywords: parenting, middle life, gender consciousness, fathers' "breadwinner" role, children leaving home